

コーヒーが社会復帰にひと役買うカフェ

クロスローズ カフェ Crossroads Cafe

ジャイアンツの本拠地、SBC球場の4ブロック先にあるこのカフェは、いつもお客でにぎわっている。シンプルだがセンスのよいインテリアに加えて、コーナーには書店も併設し、客層を広げること成功。香り高いコーヒー、低価格設定、やわらかなライティング、座り心地のいいソファ、ゆったりしたスペースなど、どれをとっても一度落ち着くと離れがたくてしまう、不思議な力を秘めたカフェだ。

じつはこのカフェ、全米でもきわめてめずらしい組織が経営母体となっている。「ディランシー ストリート ファウンデーション」——社会のどん底まで落ちた人たちに更生の場を与える組織だ。1971年の設立以降、政府からの援助をいっさい受けることなく、約1万4000人もの受刑者や薬物中毒者、ホームレス、ギャングメンバーたちの完全社会復帰を助けてきた。このカフェは、そういった人たちに実質的な職業訓練を行なう目的で1999年にスタート。彼らはここを「訓練学校」と呼び、人生の再起を賭けて真剣勝負で業務に従事している。

もちろんカフェとしての内容も前述のとおり非常に濃く、メニューも豊富。約400㎡の広い店内には椅子やソファで70席、中庭テラスにも70席までの設置が可能。ドリンクはエスプレッソ、カフェオレなどのコーヒー各種をはじめ、スムージー、ソーダファウンテンのほか、リーフティーの種類も40種類を超える。フードは「エスニック・アメリカン・ビストロ」をテーマに、CEOのミミ・シルバートさんがメニューの考案を担当。唯一「外部」から迎え入れた人材で、食材や盛りつけにちょっとした高級感があるのが特徴だ。そしてこの高級感とは裏腹な低価格設定の秘密だが、カフェが入っているビル自体が組織に帰属していて、家賃が発生しないこと、地域の理解ある援助者や企業により食材の一部が寄付されることなどにあるらしい。マネージャーの1人であるロバート・マンズフィールドさんは、10年の刑を終えたあとこの組織のメンバーになり、そこから早や10年の歳月が過ぎた。昨年大学を卒業し学位を取得した彼は、現在同店で後輩の指導にあたりながら、開店に迫るここから巣立つ日の準備を進めている。



ユニークな自製を多く、美しいカクテルやスイーツを得意とする。石材のカウンタートップを入口正面に設置。店内は明るく、同店スタッフの笑顔が魅力。



マネージャーのロバート・マンズフィールドさんとスタッフアン・ムラーさん。笑顔が明るく、とても親切。このカフェに誇りをもって働いている。



新書、古本、雑誌と品ぞろえも豊富なブックストアコーナー。買った書籍を、コーヒーを飲みながら静かに読めるのが魅力。



左/組織のメンバーが、自分たちの手で建てたビルの1階にある。このプロジェクトで約300人が正式な大工としてのライセンスを得た。階上はメンバーの居住アパートになっており、生活と仕事をともにするシステム。上/よく手入れの行き届いた中庭のテラスで飲むお茶は、また格別。静かに時間が流れていく。



内装もすべてメンバーたちが手がけた。居心地がよく、お茶は本を讀んだりラップトップを広げたり、とさまざま。長居はもちろんOK、なかにはギター演奏をはじめのお客もいる。



「ベストオブザベイ」賞受賞の「スイートポテトパイ」(\$2.95)。甘さ控えめの自家製で、あとを引く味わいだ。ホイップクリームが添えられる。



見た目も内容もゴージャスな「フル・ハイ・ティー」(\$12.50)。スコーン、サンド、ケーキ各種とお茶のセット。



名/「アヒナサラダ」(\$7.95)。外を軽くあぶり、中はレアのアヒナ(マグロの1種)がどっさり葉野菜にのっているぜいたくなサラダ。マンゴーサルサ、パンが添えられている。上/大人気メニューの「ターキーフォカッチャサンド」(\$5.45)。ターキーはジューシーで、フォカッチャはふわふわとやわらかい食感だ。サラダ添え。

